

# 哲學研究

第三百九十四號

第三十四卷  
第一冊

## 宗教的實存の實存的課題 (完)

——キエルケゴール諸著作の位置と意義——

石 津 照 璽

五

以上によつて、さきにあげたキエルケゴールの著作活動の第一期は終る。續く第二期の時期とは『後書』(Abschließende wissenschaftliche Nachschrift zu d. philosophischen Brocken, v. Johannes Climacus, herausg. v. S. K., 46, 2 (G. W., VI, VII))の時期であるが、この書は一八四五年の十二月に稿を了へ翌四六年の二月末に出されてをる。この時期は、上述のやうに著作期間の中間にあたり、著作の量の點からも中程に位するもので、この書は未だ審美的な態度や様式を脱し切つてはゐない。ことに、宗教のことを扱ふにも、著者のヨハネス・クリマクスは自己を「諷刺家」として規定し、宗教的に實存する前の段階に於てものをいつてをる。けれども、この書は單に審美的なるものに止つてをるのではない。『人生行路』に於て既に出てをるやうに、審美的なるものと宗教的なるものととは相容れない。著作の態度等に於ける審美的なるものは宗教的に實存することを妨げる。キエルケゴールが自身に對しても課さなければならぬ課題を妨げる。そのことを彼は知つて來てをるのである。このやうな事情で、敘述の

様式にしても匿名が用ひられてゐるし、従つて著者は敘述の内容から遠退いてゐるには違ひないが、しかし、その匿名は、上述のやうな謂に於て反省せられた匿名である。即ちキリスト教的宗教的なるものと人間的なるものとの間の距りを知つて、宗教的なるものを語るに値ひせぬ自己を伏せての、そして匿名の著者にもその資格と分とを定めての、匿名なのである。\* 更らに、語り方についても、キリスト教に關する自己の——所證ではないにしても——深い凝視による所懐を他に傳へるために、上述のやうな「傳達」の問題と連關しての匿名なのである。それ故、この書では半匿名が用ひられ、發行者としてキエルケゴール自身の名が用ひられてゐる。\* けだし、嚴密な意味に於て宗教的著作ではないが、キリスト教のことを語り、これを傳へんとして、そのことからまる事情で審美的な様式をとるのである。

\* アンティクリマクス書と對照して、クリマクス書にかかる位置については Tb., II, SS. 71, IIQ, X, SS. 167, 160 Anm., H. d. 參照。

\*\* 半匿名の書に於ける宗教的な意義については N. S. 9, VII, S. 273 參照。

しかも、この書は單にかかる性格を具へてゐるといふことに止まらない。屢、彼もいふやうに、彼の全著作活動を通じての轉回點をなすのであり、この書を最後として只管宗教的に生き抜かんとして、一八四八年春にかけての宗教的沈潜と葛藤の時期に入るのである。ことに、われわれの主題にとつても重要なことは、この書に於て彼の全著作活動の目標をなすものが打ち出されたことであつた。それは、「人は如何にしてキリスト者になるか」といふ、謂ゆる「問題」であつて、この時期以後に於ける彼の活動と關心とは、ここを回つて始終してゐるのである。尙ほまた、この時期に於ける考へと従來の時期のものとの關係は如何かといふと、屢、ふれたやうに、『後書』は爾前諸書の集結であり集成である。

人は如何にしてキリスト者になるかといふ課題の扱ひ方は、キリスト教神學の正統によつてなされるのではない。

キェルケゴールが解釋しつたキリスト教の實存解釋に則つての、各自的な、従つて彼自身の自己の、實存への凝視であり内面化であつて、實存する者が實存することを超えて永遠なるものに參するに至る道行きであり思索的實驗である。即ち始終にわたつて、主體性内面性の眞理を説き、眞理の主體性内面性を強調する。キリスト教の眞理概念について、キリスト教の根本は精神であり、精神とは内面性であるとなす。内面性とは主體性であり、主體性は本質的に激情である。その極限に於て、自己の永遠の福祉に無限の關心を持つる個體の激情であるとズイ (VI, S. 120)。\* 但し、キリスト教に關するかかる見地は後に多少の轉移があるが (z. B. *vgl.* Th. I, S. 407, II, S. 123, XI, Ss. 186, 44f, 135f)。しかし、實存に關する考への根本は變らない。勝義の實存とは、永遠なるものに接するにあり、それは「瞬間」の現成をなすことに外ならない。そのためには、實存する個體は如何したらよいか。それは個別に居て、永遠なるものを期し、只管、可能的なるものを現實的なるものに轉ぜんとする内面的努力に始終し、主體化内面化の極に於て自己の無に處り、死に至る病を病み、激情的な決斷によつて超越への飛躍を期するにある。常に各自の現前現實の實存の場面に於てこれを期するにある。なほ、かかる徑路に於て、彼はとくにこの書で宗教性 A と宗教性 B との區別を明らかにし、後者に於ける超越的逆説的な宗教性によつて、最勝義に實存する仕方を明確にしたのである。

\* 精神の概念は「不安の概念」にも出て來るが「死に至る病」で熟して來る。彼は人間の理念を精神となした。

これらの點からも明らかかなやうに、『斷片』等とは、特異のキリスト教解釋に於て關係するけれども、本書の本質的な主題は、實に彼の實存哲學の眼目をなすところの、永遠なるものに接するに至る「如何に」の問題に存し、只管なる主體化内面化にあるのである。\* かかる主題に於て、この書は前の時期に於ける諸思索の單なる集成ではない。しかも、爾前の諸書の所論が常にその背景をなしてをる。即ち敘述が實存の基本的構造に附して進られてをること、さきに轉回後の態度として當然であるが、とくに本書に於ては、神と人間との間の杆格は嚴に確保せられ、實存

の彼岸なるかの逆説的對象が確立せられて、それとの對決に於て、神へまでの捨身の運動が最もきわやかに敍べられてをる。けだし、このことは、『不安の概念』以後の匿名の書に於て、また一八四三年秋以來の諸『教説』に於て、熟して來た一連の考へが、ここに一貫した形に於てそれぞれのところを得てをるものとみられよう。また既に『あれか、これか』に出、『人生行路』に於て整へられた人間實存の諸段階は、更らにここでは嚴密な意味に於ける宗教の段階を目ざして、五つの段階を示してをる。ことに倫理的なるものに關する個有の考へは本書に至つて確立せられ、倫理的とは現實的に生きることに、個別化に生きることであり、宗教的に生きる態度の裡にあることが明らかにせられた。『不安の概念』等から後の觀點と相應するものである——このことを忘れて、『あれか、これか』で用ひられ『怖れと戦き』に於て難破する倫理の考へをもつて來ては、本書の内面性は理解出來ない。その他、決斷、飛躍、超越等の諸概念から、瞬間や同時性の問題、絶對的逆説や悩み、負目、罪の問題等、『怖れと戦き』乃至當初以來の諸書に見える諸概念も、\* 本書に於ては凡て一系の秩序だつた位置におかれて來てをる。『後書』の内容については、更らに別に評論するが、概してキエルケゴールの實存に關する考への根本は、この書乃至この時期のものに藏まつてをるとして過言ではあるまじ。

\* たとへば、キエルケゴール自身も指摘してをるが (VI, S. 302)、『あれか、これか』でも既に真理の主體的性格をいひ (II, S. 308)、初期の『教説』にも個別のことが敍べられる (たとえば、S. 14)。その他、本名の『教説』には罪の問題等も早くから出た。

このやうな内容上の連關とともに、『後書』に於ける著作態度のことにふれておくことが必要である。『後書』は以上のやうに兩前の諸書の集結をなしてをるが、態度の上からいふと、『人生行路』が審美的なるものを超える限界からの、審美的なるものの振り返りとすれば、『後書』は更にそこを越えた眞に宗教的キリスト教的なるものを見透した上で、そこへの目論見に於て、實存の在るべきすがた、處すべき様を明らかにしたのである。そこで、答へられな

ければならぬ問題が二つある。一つは、自己の態度としても、その處すべきやうに身を處すといふ問題であり、他は、そこまで来て、従來の態度をかかる見地から如何に申し開くか、辯じるかといふ問題である。

『後書』の場合をも含めて、従來の態度は審美的であつた。たとへ宗教のことを扱ふにしても、審美的詩人的な態度に於てなされたのであつた。しかし、今や宗教への目論見が立てられ、自己の態度も亦たここから照し出されて來る。即ち、事實もさうであつたであらうが、彼はここに立つて、従來の態度が間接的方法をもつて、即ち詐術的誘導によつて、内面性の傳達を意圖した由をことわるのである。\*『後書』の本文にもあるが、『瞥見』や『最初にして最後の釋明』(Eine erste u. letzte Erklärung v. S. K, (G. W. VI, S. 274 f.))等で辯明するところである。なほ、この點については、後年の『觀點』で稍、牽強附會に近く強調せられ、『後書』及びこの時期までのものに就いて、自己の「宗教的著者」であつた所以を辯じてをる。しかし、等しく宗教的著者であつたとしても、著者の態度に於ては、これまでの時期と次の時期以後との間には大きな相違がある。けだし、本書では、人が最勝義に於て實存すべき様を識すので、キェルケゴールは未だ自己をそこに投じてその責任と顧慮とに於て語をなしてをるのではない。審美的詩人的な態度に於て語つてをるのである。\*とところが、正しく本書でいふところに徴しても、彼自身も亦た謂ふが如くに行はなければならぬことになる。謂はば彼自身の課題としても、ここに向後の課題を据ゑたのである。\*\*\*しかし、著者の態度としての、審美的なるものと宗教的なるものとの間のことは、未だ充分に厳しく反省せられてはゐない。嚴密な意味でいへば、この著作に見える態度は宗教的ではない。その意味では、皮肉にいへば「宗教的著者」ではないのである。\*\*\*\*

\* この時期にソクラテス的方法を擬してキリスト教の解釋をなすのであるが、恰かも同様の仕方によつて自分が従來の著作を物したことを彼へてをる (vgl. VI, S. 301f., VII, S. 274f.)。けだしレギーネに對してとつたらはらの態度が、これの著作の様式として出て來てをるのである。

※ 上述のやうに倫理的なるもの乃至倫理的態度は宗教的なるもの側におかれてをる。

※※※ この點でも後の『觀點』とは異なる。『觀點』では宗教的に身を處せんとして努力と葛藤とを經た揚句の、そして、再び著作に携はらうとしての、言ひ分である。本書の場合には、宗教的に身を處しなければならぬやうな目標を据ゑて、その目標に沿つて自分も審美的態度から身を轉じなければならぬ場合である。それ故、通じて宗教的著者といつても、この時期の前と後、或は『後書』と『觀點』との間には、とくに、その態度に於て、大きな性格の相違があるので、平板な連続ではない。今の場合には宗教的態度への始まりであり、生地の方がたである。

※※※ 勿論、初めから宗教のことを事としてをる。また著作態度の上でも宗教の方へと自己を選び方向づけて來てをる。『觀點』でも全體の首尾に於て宗教的著者なので、個々の匿名の書を別々に理解されることは迷惑であり誤りであるともいつてをるが (V. S. 4), かかる謂に於ては宗教的著者といつてよいであらう。ただ、この言葉の意味する中味には種々の階層があるのである。

『後書』で宗教的に實存することの課題を据ゑたキェルケゴールにとつて、さきあげた中の一方の問題は、爾後の彼の身の處し方の問題になつて來る。『後書』の著作態度も審美的であつた。しかし、今やそれではすまされない。著者その人が射ら宗教的な歩みを歩まなければならぬのである。そして、恰かも既に『人生行路』に於て、更らに『後書』に於て、この間に於ける態度の問題が反省せられ、詩人的審美的なるものが否定せられて來た。ことに『後書』では、その主題に従つて、主體的に生きることは倫理的に生き宗教的に生きること以外ならぬとせられ、宗教的に生きることは、個別的の内面化に於て、倫理的に生きることと相即するとせられた。ところが、著者としての詩人的審美的な態度はかかる實存的行爲的パトスをもつてゐない。表現の技巧や心理的眞理以外のテロスに仕へてはゐない。倫理的なるものをもつてゐない。それ故、宗教的態度と審美的態度とは倫理的なるもの有無によつて相反することが反省せられたのである (Dahls, VII, S. 78, bzw. VI, S. 305-6 Aum)。\* ここに於てか、彼は從來の態度

を捨て、従来のやうな著作に携はることを抛つて、新しい生活態度に轉じなければならなかつた。かくて、第三の宗教的著作の時期に入るのである。

\* 即ち倫理的なるものに於ける「備み」の有無によつて分れるのである。このことは内省的にも對外的にも強調せられるが、對外的な謂では上掲の *Das Evangelium der Leiden* によく出づる。尙ほまた倫理的なるものもつ命法性の有無に於て、二つの態度を分ける考へは、やはりこの時期に於ける *Das Buch über Adler* (Abs. v. Th. Haecker, 1926 (2 Aufl.) 等からの展開である。

## 六

彼は『後書』を一八四五年の暮れに仕上げ、四六年の二月に出してをるが、この間に、いふが如く身の上に大きな變化を受けたのである (X, S. 40)。即ち上のやうな経過に加へて、偶々起つたコルザール (Karsan) 事件なる外部的事情は、内省的な彼の性格に拍車して、従来の態度に更らに深刻な、そして重疊の波瀾をふくんだ、反省と變化とを強ひたのである。彼は既に自己の態度を反省し、『後書』に於て、従来の諸書の始末をつけたのであつた——この事件よりも前にさうだつたと識つてをる (Th. I, S. 277 f., 1846. 5. 5-15) ——。ところが偶々ゲア (Gier) といふ文學年報の誌上で、メエラー (P. L. Müller) といふ人が「多くの匿名を用ひる著者」を問題にし、『人生行路』の中の事件を批難したのであつた。キエルケゴールの名を挙げたものではなかつたが、キエルケゴールは大きな衝撃を受け、世間も亦彼に好奇の目を向けるやうになつて來た。キエルケゴールは同書中の「負目があるかないか」の著者タキツルヌスの名を藉りて、一八四五年の十二月二十七日と翌年一月十日に、これに對する反駁を「祖國」誌上に寄せた。この間、メエラーも亦た十二月二十九日の同誌上で應酬し、コルザールの主筆ゴールドシュエミットも一月二日の紙上でキエルケゴールを駁したのであつた。コルザールといふのは當時コペンハーゲンで出てゐた週聞新聞で、

氣品の高いものではなかつたが可成讀まれてゐた。一八四〇年に主筆のゴールドシュニツトが創めたものであるが、彼はキェルケゴールと會識の間であり、同紙は從來キェルケゴールの匿名の著作を賞めてゐたのであつた。ところがメネラーは主筆の友人で、この新聞の關係者であつたので、キェルケゴールの反撃はコルザールに向けられたのであつた。それで、ゴールドシュニツトも對立の態度に變じ、爾後暫らくキェルケゴールに對する擲論が紙上で續けられた。<sup>\*</sup>

\* vgl. Schrenpf, S. K., J. S., 204ff., Jörlin, S. Ks Leben u. Wirken, S. 163ff.

この事件は、表面の變化の尠い彼の生涯の大事件であつた。この事件をきつかけとして彼は更らに後に對他的な著作活動に入るのであるが、とくに彼はこのことによつて著作が責任ある行爲であることを覺つたのである (Tb., I, S. 233, (1846.3.9))。彼は最早やこの點からもイロニーに身をおくことは出来ない。眞摯な本氣さを要求されて來たのである。しかも、さきの時期に、行爲的主體が宗教的倫理的でなければならぬ、宗教のことを物する著者は弱ら宗教的でなければならぬといふことが反省せられてをる。かくて上來の傾向と相まつて、彼はまともな宗教的沈潜の期に入るのである。『後書』に附録せられた『最初にして最後の釋明』は、『後書』の稿を了へて印刷に廻してゐた間に書かれたもので、正しく右の事件の最中のものである。タキツルヌスの名でゴールドシュニツトやメネラーを駁したキェルケゴールは、最早や自分の名を伏せておくわけにゆかない。恰かも既に從來の著作は打ち切らうとしてゐた時なので、ここに彼は自己の本名を出して從來の著作に關する釋明を行つたのであつた (vgl. Tb., I, SS. 237 f., 257 f., 253 f.)。書中の *匿名* 匿名による著作態度が最早や続けらるべきではないことを識してをる (VII, S. 277)。<sup>\*</sup>『觀點』の回想も『後書』の時期を最後として、匿名の時期は過ぎ、爾後宗教的著作——即ち本名の教説書——に從つたことをあげてをる (X, S. 10)。當時の『日記』はこの間の消息を傳へ、自分の考へとしては、自分を地方牧師に仕立てたいといひ、審美的な筆硯を斷つことを願つたのであつた (Tb., I, S. 237 f., (1846. 2. 7) wts. S. 306,



(1847. 1. 30)。當時この願ひは切實で、謂ゆる宗教的著作即ち本名の教説書に筆をとることすら避けようとしたのであつた。しかし一方には新著の要求も波のやうに押しよせて来て制することが出来なかつた(K. S. 61)。このやうな具合で、『後書』の後略、二年の間、彼は射ら宗教的に處し、また、とくに宗教的に居てそこからものをいはうと念じたのである。即ち彼が目してとくに宗教的著作といふ本名の教説の大冊を相ついで出したのであつた。一八四七年三月には『種々なる精神に於ける教説』(Erbauliche Reden in verschiedenen Geist, v. S. K.)を、九月には『愛のはたらき』(Leben u. Warten d. Liebe, v. S. K. (S. K., Erb. Reden, Bd. III, 1924))を、翌年の四月には『キリスト教教説』(Christliche Reden, v. S. K. (in: S. K., Erb. Reden, Bd. IV, 1929))を出してゐる。\*

\* 諸教説の著作時期については、ホルシとよると略、Erb. Reden in verschiedenen Geist の Gelegenheitsrede は四六年の三月——五月、Was lernen wir v. d. Lilien...及び Evangelium d. Leiden は四六年の十月から年末にかけて、

Leben u. Warten d. Liebe は四七年の初めから八月初にかけて、

Christliche Reden 中 9 Sorgen d. Heiden u. Stimmungen in Leidenkampf とは四七年の十月——十二月、Reden beim Anfang am Freitag は同年八月——十月、Gedanken, die hinterücks verwenden... は翌四八年一月——二月の間で出来たもの(Hirsch, K=studien, II, S. 839-842)。

なほ、この外に宗教的著者たる資格について彼が沈吟久しうした問題性と關係の深い Das Buch über Adler 等、彼の生前には全體としては出なかつたが、最初の稿は四六年の七月より十月にかけて出来、翌年一月には序文が書かれてゐる。第二の稿は引き続きこれに手を入れてその一月に、第三稿は四七年の夏の頃に手を入れて十一月に出来てゐる。後年の彼の著作態度に對して決定的な意義を有する Zwei kleinen christlich-religiösen Abhandlungen 中 9 第二論文 Über den Unterschied zwischen e. Genie u. e. Apostel は、元來この『マテウ』に關する書の一節であつたが、四七年の十二月から四八年の十月の間に手を入れて別にまとめられた。そして Hat ein Mensch Recht, sich für die Wahrheit torschlagen zu lassen?

は四七年の後半から暮れにかけて出来たもののやうである(ヘルシは九月頃から後の『日記』の記録をあげてをる。ヘッカー譯の『日記』では、八月以降のものに連關のあるものが見られる(Tb. I, SS. 239, 244, 256 f.)。キエルケゴールの序文の日附は四七年末となつてをる)。さきの論文と併せてこの論文は『倫理的宗教的小論文』となつて四九年五月十九日に出された。

ところが、その後更らに彼はかかる態度を仕遂げたかといふと、さうではなかつた。彼が期したやうな厳しい意味で、躬ら宗教にゐて宗教のことを語るといふ境涯にをることが出来なかつた。彼にとつては、躬を宗教においた上での宗教的著作よりも、その天分と才に委せて、宗教的に身を處することなしに宗教のことを語るといふことが、彼のためには生きる條件だつたのである。即ち『日記』では以前に牧師になりたいといつたが、そのやうな課題は自分には本質的ではない。自分は論索すれば楽しいのであり、生の不愉快と惱みとを忘れる。浮んで來る想を殺すことは何としても痛苦で、論索することは神の與へた私の職分であらう等と云つてをる(Tb. I, SS. 306-8, 310, ('47.1.20-1))。このやうな彼の性向に加へて、彼をして再び只管なる著作に従事せしめ、とくに、新しい意味の「宗教的著者」としての態度を決せしめたものは、實にさきのコルザール事件であつた。\* このことを機として自分は更らに内面的に考へることが出来、また、牧師になるといふことが性に合はず氣鬱な考へであつたことを慥かめることが出来た。そのやうな時を得たことは有りがたく、世俗の世間から攻撃を受けたことは神に謝すべしとなしてをる(Tb. I, S. 312, ('47.1.24))。

\* コルザール事件のこととはヘッカー譯の『日記』では I, S. 253-265 等にかえてをる。またゴットシエットの抜萃(S. K., Buch des Richters, seine Tagelicher... von H. Gottsched, 1905) では S. 46-70 に集められをる。

さきに著者たることは責任ある行爲であるといふことを反省せしめたこの事件は、更らに、著作の上にて於て、彼をして新しい態度へと向はしめたのである。さきにはキリスト者たることの如何を問題とし、キリスト者たるべき自己に問題がかけられてゐたのであるが、事件をきつかけとして論鋒は對外的に轉じ、當代のキリスト教界即ちクリステ

ンハイトの攻撃に向けられたのであつた。續いて『日記』では、今や全く従前のものと違つた計畫の上に決心して立つてゐるといひ (Ebl.)、\* その年三月に出た『種々なる精神に於ける教説』中、ことに『惱みの福音』にはこのことが強く出てゐる。更らに數ヶ月を経た八月の『日記』には、別な反省を識す序に、これまでは世間世俗の顧慮を捨てて、神のみぞ知る、只管なる著作の仕事に純粹に専念し努力したことを語つてをる (Tb., I, S. 34a, 47, 8, 16)。

\* 即ち後の謂に於けるキリスト教的著者への移行がうかがはれる。ことにこの書では既に後の『キリスト教への訓練』に通じる線がよく出てをる。vgl. Das Evangelium d. Leiden, SS. 84 f., 97 f., wurs., 42 f. など、ハッカーのドイツ譯にはないが、『愛のはたらき』を印刷に廻す少し前なる八月の初めの『日記』では、後年の謂に於けるキリスト教的著者として立つことを識してをる (vgl. Hirsch, I, S. 34a)

既にここでは、後に絞へるやうな意味に於ける宗教的著作が、神の前なる『攝理』に於ける仕事であると考へられようとしてをるが、しかし、そのやうな考への落着は、決して容易に得られるのではない。著作は行爲であり、著者はその内容に責任をもたなければならぬ。宗教のことを事とする著者は躬ら宗教的でなければならぬ。しかし二年の歳月はそのための努力に幸ひしなかつた。彼は自ら謂ふが如き宗教者になりきれない。それにもかかはらず著作とくに宗教的著作をもつて自己の生命とするのである。しかも今や鋒を世間に向け、教界を裁かんとするのである。離つて思へば、當の難者自らはキリスト者であるべくしてキリスト者でない。すると結局クリステンハイトを難じるにクリステンハイトをもつてすることにはならぬであらうか。この問題の結末が、外部的には四八年以後の大著に於ける新しい匿名となつてあらはれるのであるが、ともかくここにさきの反省からは到底相容れぬ矛盾があり、従つて開断なき内面的葛藤と抜くことの出来ぬ憂鬱とが續いたのであつた。

それではこの問題の内面的な解決の道は何處に求められたであらうか。彼は決して『後書』以前の時期に於けるがごとき態度に逆もどりしたのではない。キリスト者たらんすることを放棄したのではない。キリスト者として宗教的

著作に従はなければならぬし、また従はんとしたのである——この間のことは前の諸節であげたやうに『觀點』や『私の著作活動について』等の回顧や告白にも明らかにみられるとほりである——。即ち當時の彼の關心はこれに對して恩寵と罪のゆるしの信仰に向けられた。けだし當然のことであらう。エルンストといふ事が問題になり、厳しく身を處しようとする彼にとつて、躬ら宗教者たらずして宗教的著作に従ふことが容され、ことに神の前で容される道は、この外にはないであらう。ここにとくに『觀點』等に明示せられるやうな攝理觀の生まれて來る事情がある。即ち宗教者たらずして宗教的著作に携はるることを攝理として感得したのである (vgl. X, SS. 61, 70, 48, 50, 52, 54)。

このやうにして、著者たることの責任について厳しい内省の道路を辿つた間に、彼は上にあげたやうな大部の宗教的論策即ち本名の教説書を物したのであつた。上來の問題に連關するものとしては、先づ『アドラーに關する書』がある。この書は生前には出なかつたが、『後書』の後に物された最初の大冊である。\* 一八四九年の五月に出された『二つの倫理的宗教的小論文』とその内容上密接な連關をなすものであるが、とくに審美的な態度と宗教的な態度との區別を明示し、天才と啓示を拵ふ者との相違について敘べてをる。即ち倫理的なるものは「爾爲すべし」なるかたちで與へられるが、審美的な態度は空想的で、この命題を身に引き受ける眞摯さを缺ぐ。ところが、宗教的な態度に於てはこの眞摯さをもつのであつて、啓示に於ける「爾爲すべし」なる力は個人に最も強く應へるといふのである。このことは、後に謂ゆる「權威」といふことと關係して、彼の著作態度を決定せしめる上に極めて重要な意義をもつものであるが、同時にまた、この時期に於ける彼の『教説』の主旨の上に獨特の色調をもたらしめてをる。それは、宗教的とくにキリスト教的なるものもつ異質的な倫理的命法性の主張といふことである。神と人との間に質的な懸絶のあることは、既に『後書』の時期までに明らかにせられた。此岸の主體が内面化を盡すことはその時期にもいはれたが、この時期の『教説』は、彼岸の神を目當てとして積極的にこれに仕へ、これに處する仕方を傳へようとする。即ち『愛のはたらき』では、愛を神から、人間とは異つた質としての神から、與へられる命法性に於て論じ、また、

『惱みの福音』では、とくに神に隨ふことを語り、それは、御子なるキリストにならつて、惱みに身をおくことであると主張した。それが神に隨ふ唯一の道であるといふのである。このやうなわけで、同じく教説的といつて聖書に倚つてゐても、前の時期のものとは異なつた、直下なまともなものを感ぜしめるのである。

\* 上掲、九頁、註、参照。

なほまた、この時期で注意すべきことは、個別性といふことである。『あれか、これか』等で普遍的なものとして規定せられた倫理的なるものの性格は、『不安の概念』等に於て否定せられ、『後書』等に於ては、倫理的現實性が専ら個別性に存することが強調せられたのであつた。とくに既に『後書』等では、この意味に於ける倫理的なるものは、永遠なるもの、殊に神、への關係に於てみられてをる。けれども、倫理的なるものは個別的なるものであり、その個別的なるものが、宗教とくにキリスト教の決定的な範疇であると考へられ、神に隨ふ態度として強調せられたのは、實にこの一八四六年から四八年にかけての間に於てであつた。即ち『觀點』に附録した「個別的人間」でも、衆の中に眞理はなく宗教はない。眞理と、そして宗教とは、唯だ個別の中に於てのみ獲られることを主張する。<sup>\*</sup>このことは一八四七年初めの頃の『日記』にも見え、また後の『觀點』や『私の著作活動』に於ても、この間の様子を回顧してをるが、<sup>\*\*</sup> 更らに、『種々なる精神に於ける教説』（就中『惱みの福音』）や『愛のはたらき』等、この時期に於ける『教説』でも、上にあげたやうな問題の連關から、神を自當として身を處する個有の態度として個別性といふことが所論の地をなしてをるのである。

\* vgl. *Der Einzelle*, X, SS. 79 f., 92 f., 96 f., この論文は二つの小論文から成り、『觀點』の附録であるが、一は一八四六年の日附けであり他は四七年に\*とめられたものである (vgl. X, SS. 79, 86, 97. Anm.)。

\*\* z. B. *Tb.*, I, SS. 315, 327 f., X, SS. 163 f., 40 f.

## 七

このやうに、總じてこの時期に於ては、彼の態度も所論も、とくにキリスト教的成立的なものに對するまゝな積極的な關心を示し、殊にその態度としては、世間と斷つて自己の負口に悩み抜き、もつて神に隨ふ信仰に生きようとしてをる。それが『後書』の据ゑた目論見にも副ふ所以であつたのであるが、しかし、彼にとつて事實はさう一律にはゆかなかつた。コルザール事件によつて知らされた世間は、この事件をきつかけとして彼が更らに深く凝視し沈滞したやうなキリスト者としての生き方をしてゐない世間であり、教界であつたのである。キリスト者として個別に沈み、悩みに於てキリストの悩みにならひ、以つて神に隨ふといふ課題を、彼は自身に對しても課したのであるが、この見地に立つてみると、彼は教界に對しても黙し得なかつた。それには彼の性來の著作慾もあつた。また事件によつて恐らく牧師になるとか官途につくといふことが懼られた彼にとつて、著作の道は經濟上の關係もあつたであらう。\*かくて、只管キリスト者として始終するといふことと論鋒を世間に向け教界に向けるといふことは、矛盾のままに糾はれて二年の期間が続いたのであつた。この間、上述のやうに既に再び著作に携はる意嚮は一八四七年初め以來の『日記』にもみられるが、とくに翌四八年四月に至つて、彼はかかる矛盾と憂鬱とを抛つて決然と對外的攻撃に筆を執らうと考へた時期に辿りついたのであつた。私の全本質は變化した。韜晦と緘黙とは破られた。私は語らねばならぬ、と十九日の『日記』では認めてをる (Ib., I, S. 373)。そして、當時既に『死に至る病』(Die Krankheit zum Tode, v. Anti-Glimacus, herausg. v. S. K. (G. W., VIII)) を『キリスト教への訓練』(Einführung im Christentum, v. Anti-Glimacus, herausg. v. S. K. (G. W., IX)) の内容をなす稿を起してをり、また『觀點』(Der Gesichtspunkt für meine Wirksamkeit als Schriftsteller, (G. W., X)) の稿も十一月までに大體了へられてをる。\*

\* 經濟上の窮迫との關係に於ては、z. B. Tb., I, SS. 373-4 (48.4.19), 375 (4.24), II, S. 71 (49.7)。この間曾て志業のあつたことについては、z. B. Tb., II, S. 93 (49.7)。なほ憚りの深き理由は以前にあるがその事情は別稿にゆづる。

『死に至る病』と『キリスト教への訓練』の内容をなす稿はこの年の早春から起され、ことに前者は五月には大體了へてをるとみられる。vgl. Schrenpf, S. K., II, S. 39 f., Hirsch, I, 345 Ann., Tb., I, S. 379. 『觀點』と『書』は Tb., I, S. 413, bzw. Hirsch, I, S. 288 Ann. 3.

とはいへ、彼の心境の錯綜が解決し切つたのではなく更らに重疊の動搖をくり返すのである。右の決心を識してか數日後の『日記』では、緘黙を越えることを絶えず念頭においてゐるが、「否、否、それは越えられぬ。勤くとも今は」といつてをる。けだし、精神的勞作に携はることは自分を満足させ、心を充たしめることではあるが、しかし、一方に自分は自己の悲しみと惱みに於て神に對ふつとめを否むことは出来ない。罪のゆるしを信じる。けれども、それは、わが罪を荷ひわが罪の思ひに身を委ねるといふ仕方のもとに於てのことであると考へられる。それ故、そのためには緘黙を続けなければならぬといふ。(Tb., I, S. 374 f. (48.4.24))。同じやうな動搖は前年の八月にも繰り返されてゐた。即ち『愛のはたらき』を書いて後、旅に出ようとしてゐたのを思ひ止まつて (vgl. Tb., I, SS. 339, 341, 343)。それまで自分は著作によつて自分の憂鬱をおさへてゐたが、今は更らに自己を見究めなければならぬ。それは、神により近く處ることなのだから。そして、自分を見究めるといふのは、自分の幼い頃からの性向をなしてをる憂鬱に只管に身を沈めることであるといつてをる (Tb., I, S. 342 f., (47.8.16))。自己を見究めるといつても、『後書』でのやうな一般的主題としてではない。正しくキェルケゴール自身の身にとつて、神を目前として神への道であり、神に於ける行業なのである。しかも、その道とは憂鬱と惱みに身をおく外はないのである (Tb., I, S. 376)。

著作の道と信仰の道とはこのやうに全く相反する。そして、神への道は狭く且つ安らぎのない道である。むしろ安らぎのないところが神に近く處ることである。しかし、彼がこの道に深く入れば入るほど、正しくこれと反對な、厚顔にして無恥な教界が目につく。筆を執つて鞭たうにも自分にその資格があるかと躊躇せられる。またそれは自分の神に忠實なる所以でもない。ここから抜け出すほどに、自分の信仰は成就してはゐるなう (Th. I, S. 376, (48.4.24))。かかる葛藤の裡に、上にあげた三つの大冊が書かれたのであつたが、恰かもこの間に、かかる矛盾の解決を彼は「攝理」に見出したのであつた。宗教的著作に携はることが神に仕へる所以であると感得したのである。即ち『觀點』では將來の自己の活動をあげて神に委ねた。また、この觀點から自分の過去の活動をふり返り、神に召された著作の役目の果して來た跡を辿つたのであつた (Bd. II, X, S. 45 ff.)。しかし、このことを識した『觀點』も、他の二書も、孰れも彼は直ちに出すことを憚つたのである。\*

\* 『觀點』は彼の生前には出なかつた。自分の意を得た書であるが、自分の死後に出されるであらうと云つてを (Th. II, S. 20)。これらの著作は、上來の所説を續めて特に著しくキリスト者たることの如何を語り、教界を難駁し指彈するものである。さきに四月の決心に際しては、謂ゆるキリスト教的著者として、射らいふが如きキリスト者たらずとも「誘導的」な意味で教界を覺醒させようと思つてゐたであらう。すでに前年十月頃の『日記』でも、自分についての言葉として、自己を詩人の宗教改革者に擬してをる (Th. I, S. 348)。しかし、先の時期に彼が悟つたやうに、著作には行爲的責任がある。また、とくに傳へんとするキリスト者たることの如何は、内在の範圍のことではない。質の違つた彼岸からの告知を享けることである。それ故、初めは「誘導的」な仕方でもよいであらうが、結局のところ、これを傳へる者は眞理の證し手でなければならぬ。このやうに四八年七月の『日記』では語つてをる (Th. I, S. 407)。眞理の證し手は、違つた質を齎す者として、殺されることを必定とする。如上の書を公にすれば殺されるかも知れない。しかし、自分はそのやうな者であらうか。ここに彼は自分の著作者たることの限界について思ひを致したのであ



る。即ち、キリスト教の傳達といふことは「權威」に於てなされるべきである。しかし、自分は射らキリスト者であることなしに、相手の反省へまで、これを傳へて注意を促すのである。反省から反省へとキリスト教を傳へるに過ぎない。これが自分のキリスト教的著者としての使命であり、ここに自分の著作活動の限界があると考へた (D. u. S., X, S. 160, Anm. \*)。

\* この脚註は四九年十月の日附けである。

かかる越言を識したものが『私の著作活動』(Über meine Wirkksamkeit als Schriftsteller, v. S. K. (G. W., X))であるが、この論文は四九年三月の日附けになつてゐる。ついで、五月の十四日には『あれか、これか』の再版と『野の百合と空の鳥』(Drei fromme Reden, die Lilie auf dem Felde u. der Vogel unter dem Himmel, v. S. K. (in: Erb. Reden, IV))とが同日に出されたが、彼は、この時期に、自分が「キリスト教的著者」として持つべき態度や位置の決つたことを報じてゐる (X, S. 165)。即ち詩人的に著作の面から自己を伏せるのではなく、行爲的主體としての責任に立たうといふのである。\* しかしながら、自分は書中に識すが如き者であるのではない。自分は眞理の證し手ではない。自分は特別なキリスト者としてものをいつてゐるのではなく (Ib., II, SS. 32, 92, X, S. 160, Anm.)。「詩人的思想家的」なもののいひ方をしてゐるのであつて、眞にキリスト教を傳へる資格たる「權威」に於て語をなすのではない (vgl. Ib., II, S. 48 f., X, SS. 166, bzw. 137)。このことは自分の著作にとつて全く決定的な轉向で、自分は使徒ではなく天才の部類に屬すべきものであり、反省に於て語るのである (Ib., I, S. 403, II, S. 48 f., X, S. 160, Anm.)。従つて自分は殺られることはない、<sup>1)</sup> かう思つたり自分の生活のことを案じたりしたのは過敏症のせよであつたとも云々 (Ib., II, S. 44 f., (248-5.8))。

\* 『死に至る病』や『キリスト教への訓練』は發行者に自己の名を出してゐる。

かくて、『あれか、これか』の再版の出た數日後の五月十九日には、出すことを躊躇せられてゐた『二つの倫理的宗

『教的小論文』(Zwei kleine ethisch-religiöse Abhandlungen, v. H. H. (G. W., X)) が出版せられた。『アドラーに關する書』との關係は先にあげたが、この書には彼の著作の「限界」が示され「最大の可能性」に對する鍵が藏せられてゐるといつて、彼はこの書に重要な意義を認めてゐる(Ib., II, SS. 46 f., 76, X, S. 160 Anm.)。この論文は、キリスト教の根本本質から、とくにその傳達に關する主題を扱ひ、「權威」の問題を的示してゐる。即ちキリスト教的なるものは人間的なるものと質が違ふ。これを傳へる者は「使徒」であり、使徒は神の質に於て神の質を人間に齎らすのである。しかも、このことたる、ただなることではない。神の質が人間の質の中に齎らされる時、人間の質はこれを受け入れない。異質的な眞理が人間に齎らされる時、人間はこれを殺す。それが必定である。眞理はかくて死の證しに於て人間に齎らされるといふのである。

\* 「權威」といふことは神の質に由來し、神の質を傳へる者は使徒や牧師である。牧師は按手證、つまり僧職授任の儀式によつて資格づけられるといふ資格のことを——「説教」といふことと連關して——、キエルケゴールは早い頃から問題にしてゐた。ところが、權威ある所以がこのやうに資格のことから、「證し」のことに及んで來てゐる。二つの論文の間にもかかる問題の連關が見られるであらう。

一八四八年春以來、軀を切つたやうにして書かれた大冊は、長い躊らひの後、以上のやうな見地を得て、謂ふがごとき意味の「宗教的著者」の著作として遂に出版せられた(Dzw., Ib., II, S. 351 f.)。即ち『死に至る病』が一八四九年の七月末に出され、ついで、より積極的な論難の書『キリスト教への訓練』は翌年の九月廿七日に出されたのであつた。この著者はヨハネス・ブンテイクリマクスといふ。やはり匿名であるが、それには、上に敍べたやうな經緯を経た特別の顧慮と意義とが托されてゐる。即ち、キリスト者たることの如何は、神の質に於て語られ、射られ、これを事證してこそ傳へらるべきことである。けれども、彼自身の努力にも係らず、謂ふがごときキリスト者にはなり了はせぬ。それ故、特別な、飛び切りなキリスト者ブンテイクリマクスを立てて、その人に語らせるのである。著作の

内容から遠退いて責を逃れるといふ謂の、單なる審美的な匿名ではなく、自分が相應せぬ故に、語るに相應しく責を負へる人に假托した、謂はば匿名を否定した匿名が須ひられてをる。勿論、キリスト教の眞理を傳へるには、かうしても不都合はある。このことに就いて釋明したものが後に出される『私の著作活動』である。

ではアンティクリマクスは何を語るか。アンティクリマクス書の根本的な問題性は、神と人との間の絶對的な質の相違に對して、人間のこれに處する處し方を積極的に傳へようとするにある。既に前の時期に於て、神的なるもの永遠なるものが現實に存在する人間の裡にはないことが見究められた。一八四六年以後の時期に於ては、特にこのことがキエルクゴール自身の射ら踐むべき課題性の前に嚴として擬せられる。神に接し得る道は、只管なる個別化の裡にある。個別に居て神の質からの命法性を受け、個別に居て憐みを憐み通すことである。それが「神に隨ふ」途であり、キリストに「倣ふ」所以でもあるとせられた。このやうな經過の後に、飛び切りのキリスト者アンティクリマクスは如何なることを教へるか。課題は正しくキリスト者になるなり方の問題である。目指すところの神の質へと人は躬ら人間の質を遡えなければならぬ。それには如何するか。それは人間の能力の能くするところではない。人間性の範圍で爲すべきは爲すが、究極に於ては神の啓示によらねばならぬ。その啓示とは、人間が罪ある者であるといふことの啓示であり、躓きの徴としての「神人」が遣はされたことをいふ。神人とは、微塵も神臭くなく正に人で在り切つた神なる、あの絶對的逆説である。このことが正に人の罪ある所以の啓示である。

\* vgl. VIII, SS. 91, 122, Th., I, S. 401. 『キリスト教への訓練』では全卷を掩つて語られる。

『死に至る病』ではかかる課題について、人間が人間で在り通すかぎりの範圍では神に値ふことが出来ぬ有様を露はにした。『不安の概念』や『後書』と連關のある主題であるが、ここでは個體が事實的に神に向ひ神と對決して、しかも人間で在る限りでの行き憐みの次第を敘べる。人間は本来「精神」であり、精神とは神によつて措かれたところの自己と自己との關係である。従つてこの關係とはまた神への關係に外ならない。しかし現實に存在する人間と神と

の間には斷絶があり深淵がある。それ故、神に向ひ神との對決に身をおく個體は、現實に存在するかぎりの範圍に於ては、その首尾始終を盡しても、決して神と行き逢へない。神に近寄らうとすればするほど、實は距てられた自分を知るばかりである。かくて神に對ふ自己の姿は、種々の瘦と段階に於ける「絶望」である。絶望して上のやうな本來の自己自身であらうと欲しない弱氣の場合もあれば、却つて、絶望して本來ならぬ自己であり通さうとする強情もある。所詮、絶望に於ては永遠なるものとの「綜合」はなく、神に値ふことはない。そして、この、いくら行き盡しても行き違つて神とゆき値ふことなき在り方が、人間の罪ある所以である。罪とは信仰と反對の在り方であるが、かくて現實に存在する人間は、存在するかぎり、永遠なるものに繋がる本來的なものを持たず、罪におかれてをるといふのである。即ちこの書では『不安の概念』等よりも更らに端的なキリスト教的成立性に於ける人間規定に接するのであるが、一八四六年以來の彼の態度や考への推移に沿つてみると、かかる所論はけだし當然の歸結と思はれる。なほ、絶望の型と次第とが更らに自己の罪に絶望し或は罪のゆるしに絶望する等の場合について進られるが、總じて人間性の限界内に於ては、神との係はりの如何なる姿も凡て罪に於てある。しかも、神に接することの出来る信仰とは、只管に絶望といふ人間性の死に至る病を病み抜き罪の自覺に喘ぎ抜くところに於てのみ期し得られるとなすのである。従つて信仰とは罪のゆるしの信仰に外ならず、それは神との對決に於て自己をあらがひ、啓示に於て知らされる罪に於て自己を苦しみ抜くことを先決とし、慙くとも人間性の範圍に於て爲さるべき始終となすのである。

\* すでに「不安の概念」にも見える「精神」の考へ等も本書で熟して來てをる。尙ほこのことは更らに後の「自己檢察」等の所論とも相應じる。

『キリスト教への訓練』は、更らに積極的な規定性に寄せて謂ふところの眞のキリスト教の仕組まれ方を闡明する。罪に於て存在し罪に於て自己を自覺する人間の姿を敍べた『死に至る病』に對して、本書では、人間に罪ある所以を傳達して躬らにこれを悟らしめる仕組としてのキリスト教の首尾を敍べるのである。その由るところは古く、既に

『断片』等に識された考へと密接な連關をもつてをるが、さきの轉換期以來、とくに自らかくあるべしとなして躬を處さうとしたところの「目印」に相應するものが、この書にまとめられてをるとみられよう。従つて、上來見て來たやうな事情からも容易に察せられるやうに、世上の教界的キリスト教に對立し、且つこれを論難して嚴しい裁きを向けるのである。

キェルケゴールのキリスト教解釋の特異な點が先づキリストの解釋にあることは、從來の書にも見られるが、この書でも、このことを中心として「躓き」と「同時性」のことに始終してをる。信仰への道は、只管人が罪ある者であることを悟り抜くことである。しかし、人は自分で、自分の裡から、このことを知ることは出来ない。人間にこのことを知らしめるものが神の啓示であり、外ならぬ神人キリストによつてなされるのである。しかし、その知らせ方は尋常な仕方ではない。尋常な仕方では出来ないからである。即ち間接的な仕方が用ひられるのであるが、神人に關する世上の解釋は全然違つてゐる。神人とは何か最高級の人物といつたやうな範疇に合ふものではない。人が神になつたのではなく、正に神が人になつたものが神人である。それは如何いふことであらうか。神と人との間には絶對的な扞格があり質の相違がある。神が人になつたとは、感覺や悟性に知られる謂に於て、人間イエスに神のすがたが存してゐたといふことでは決してない。人になつた神はどこまでも人であり切つてをる。しかも卑められ殺された人で在り了はしてをる。その何處にも神らしさはない。このことは矛盾であり絶對的な逆説である。それ故イエスを目のあたりにした人々も躓いた。否、感覺的悟性的な、乃至、凡そ人間的であるかぎりのものが、躓く筈のやうに仕組まれてゐるのである。けだし、尋常の仕方では人間が罪ある者であるといふことを知らせることが出来ないから、神は特別な仕方即ち間接的な仕方を用ひた。即ち各自躬らがわが身の上に罪あることを思ひ知るやうに、躓きの對象として絶對的逆説を仕向けたのである。人はキリストに對つて行つても、逆説なる彼を理解することは出来ない。かかつて行つては突きかへされ、躓きを重ね自己を蕩盡して、永遠なるものに連ならぬこと、己が身の罪あること、を悟らし

められるであらう。これが信仰への唯一の道である。信仰とは永遠の質と一つになることであり、かかる逆説的なキリストとわかり合ふことであるが、それは如何なることをいふのであらうか。

キリストとは、永遠なるものが、或る時、時間の中に生成の歴史をもつた姿である。それは理窟に合はない、背理であり逆説である。しかも、これをそのとほりにわかり合ふことが信仰である。ところが、この歴史なるものとは一體如何なる者であるか。それは歴史の本質に反してをる。けれども還つて、信仰にとつて世の常の歴史は何の役にも立たない。普通の意味に於ける史上のイエスやキリスト教の歴史は、何等キリスト教にとつて本質的なものではない。信仰にとつて大切なことは、背理なるこの歴史なるものを現實性に於てもつといふことである。背理なる神の歴史を現實にするのは或はしないのは、各自の現實の當座に於ける處決の如何にある。會つての出來事は各自にとつては現實ではない。會つての神の歴史は、各自にとつては常に可能的將來的な在り方におかれてをるまでである。それ故、絶對的逆説をわかり合ふといふことは、この史上の出來事を自己の現在に於て現實的にもつといふことである。永遠なるものを現在の現實に於てもつといふことは謂ゆる「瞬間」に於てなされることであるが、永遠なるものが生成の歴史をもつたといふ、あの特別な出來事を、各自は、各自にとつて可能的な在り方から過去のな即ち事實的な在り方のとほりに、各自の現在に於て回復し、現實的にし、その出來事と「同時的」な在り方に於て、現に存在しなければならぬ。これが信仰の現實の姿である。信仰の大事が「同時性」にあるとせられる所以である。

\* 「同時性」のことは既に「断片」等で論じられ、さきに上げた「アドラーに關する書」等でも強調せられてをるが、更らに、本書の後にも「自己檢察」等でふれられてをる。ことに後期のものでは、「瞬間」と相應する理論的な構造のみならず、イエスの行業と一つになるまづのすることをなすこととして示されてをる。従つてキリストを「手本」とし、また彼に従ふ課題とも連關するべきである (Vgl. IN, S. 56 f., XII, S. 125 f., wts. Th., I, SS. 344 f., II, 98 f., 399, n. a.)。

以上がこの書の要處であると思はれるが、キェルケゴール自身としては射ら謂ふやうに處したといふのではなく、

かく期するのであり、人にも注意を喚起しようとするのである。勿論この書でいふところも、上來の経緯からも明らかやうに、彼の解釋し取つたキリスト教論であり、傳統の所論に沿ふものではなく、正しくこれに對立する。従つてこの見地からするとき、世上のキリスト教は見るに耐へないであらう。難駁の筆を驅る所以である。

アンテイクリマクス書の要旨は以上のとほりであるが、これらの書の出版は矢張り心の固くなる思ひであつた。兩書に次いで教説集が出されたが、それは心の休まる思ひであつた。S. 4 (Th., II, SS. 231 f., 237 f., X, S. 160. Ann., wts., Hirsch, S. K., II, SS. 891 f., 895 f., Schrenkpf., S. K., II, S. 154 f.)。第2『死に至る病』の後、十一月には、大司祭、收税人、罪の女なる『三〇の教説』(Drei Reden beim Aufgang am Freitag, v. S. K. (in: Erb., Rden, IV)) が、翌年の『キリスト教への訓練』の後、十二月には、罪のゆるしの問題を扱つて罪の女を聖女として書した『一〇〇の教説』(Eine erh. Rede, v. S. K. (in: Erb., Rden, IV)) が出されたのであつた。孰れも一八四三年の『教説』の序文を引照してをるが、それは彼が説教をなすと云ふのでなく、それを「權威に於てでなく」ものを「宗教的著者なることを繰り返す謂である」(vgl. X, S. 160. Ann., Christliche Reden, SS. 334, 363)。

次いで一八五一年八月七日には『私の著作活動』が出された。一八四九年三月の日附けの『決算報告』と一八五〇年十一月日附けの『附録』が併せられてをる。後者は「私の位置」と「私の手法」とから成つてをる。内容については既にふれたとほりで、始終にわたつて自分は宗教的著者であつた。しかし權威に於てではなく、詩人的な仕方、他人に注意を促すため、且つは自分の教育のために、キリスト教のことを事としたといふのである。『附録』も同じ趣旨で、眞理に於てキリスト教が要求するところを餘すところなく闡明しようとしたが、しかし決して自分が眞のキリスト者で他人はさうでないといつてはゐない。アンテイクリマクス書は他を裁いてゐるのではなく、裁かれるのは自分である。キリスト教を無限に高きものとして示さんとしたが、世上の教界にキリスト教を傳へるためには間接的な仕方が用ひられなければならなかつたとなしてをる。尙ほ、この書と同日に、キリストの贖罪の死を中心として愛

と罪のことを扱つた『金曜日の祭壇のもとに於ける二つの教説』(Zwei Reden beim Altarung am Freitag, v. S. K. (in: Erb. Reden, IV))が出された。彼の最後の教説書であるが、その序文には右の趣旨と同じやうなことが述べられてゐる。『あれか、これか』以来の著作活動は今日聖壇の脚もとに安らひを求め、自分の負目と不束とをよく知つてゐる著者は、決して自分を眞理の證し手とはいはない。ただ風の變つた一詩人であり一思想家であつて「權威をもつて」するのではなからうと云つてゐる (Christliche Reden, S. 377)。

## 八

一八四八年春以來の謂ゆる宗教的著者としての著作態度は、このやうに、この時期に於て靜かなおさまりを得たのであつた。この二つの小篇が出来上つた時の『日記』には、いひやうもない喜びと、落つきと自信とを感じると識してゐる (Thb., II, S. 260)。尙ほ、これらの書の出た少し前の五月頃から、彼は身内に新しい動きを感じ始めた。この頃の『日記』には次のやうに書いてある。キリスト教を出来るかぎり目立たせようとしたのであるが、常にその能なきを思ひ、自己を惨めに感じて意氣阻喪して來た。しかし、その考へを熄めることはなく、苦しみは益々深くなつて行き、時にはまた自分の限界を考へて内面化することのみが自分の分であることを思つたりしてゐた。ところが五月の或る朝、何故とはなく何か新しいものが産れ出るやうに神に祈つたのであつたが、やはり新しい動きが心に起つて來た。それは直接的に宗教のことを廣めようといふ考へで、著者としての自分の仕事について從來とは全然ちがつた見地であるといふ (Thb., II, S. 257 f.)。上のやうに、謂ゆるキリスト教的著者としての資格や態度におさまりを見出した彼には、かくと更らに積極的で直接的な態度が生まれ出ようとして來た。恰も『私の著作活動』やさきの『二つの教説』が出た時、彼は自信と從來よりも一層高い力とをもつて、自分の仕事を更めて理解したと識し (Thb., II, S. 260)、事實、率直端々に自分の本名を出して教界の既成キリスト教攻撃を始めたのであつた。それが一八五一



年九月十日の頃に出た『自己検査のために』(Zur Selbstprüfung, v. S. K. (G. W., XI) 2) の第二部をなす『自己を裁け』(Richtet Selbst, v. S. K. (XI)——一八五一、二年の間に書かれたが出版はしなかつた。彼の死後、一八七六年に出されてをる——である。

アンテイクリマクス書が上のやうな事情で高い調子をもつのに比して、この書は謂はば極めて地道な調子をもつて、キリスト者たるものの持すべき態度を教へてをる。キリスト者と稱して世間の人々は日常を安樂に送つてをる。しかし、眞理の證し手達は凡てのものを犠牲にし、峻烈な痛苦の中に生きた。それでもキリスト者として双方の受け得る淨福は同じものであらうか (XI, S. 15)。人々はよく自己を省みなければならぬ。聖書を自己に當てがつてみるがよい。勿論教職者も自己を省みなければならぬ。宗教のことは高くなるほど厳しくなるが、宗教のいのちが行ひにあるのであつて、談議にあるのではない。説教！それは肅然たることではないか。説教すべき任にある者は、キリスト教の思想と觀念とに於て日常を生きなければならぬ。かくてこそ人にもが語れるのである (20, 11)。しかし、お前は如何かときかれたら、自分の仕事は「權威に於て」ではなく、人を裁く等といふことは飛んでもない。と答へる外はない。ただ信仰のことに灯を向けようと思ふ。東の間だけ自分の生を信仰に擬して檢してみるのである。ルターは「信仰は不安なもの」といつたが、不安の中に信仰が開ける。もつとも、お前は信仰をもつてゐるか？ ルターにきかれたら、もつてゐないと答へる外はない (21, 10)。

一體、キリスト教的にいつて眞の不安には二通りある。その一は信仰の偉人と眞理の證し手の不安、即ち在り來りの現状を改革せんとする者の不安である——それは、しかし自分の企て及ぶところではない——。他の不安は人を内面化に導くところの不安である——この方の不安に、人を氣附かせるやうに自分は仕事をして來た。但し詩人として「權威に於て」ではなく——(S. 11)。たとへば先にあげたやうに、眞理の證し手と我々日常の生活を比べて考へてみるがよい。淨福を希ふ者にとつて、そこには信仰への不安が覺めるであらう。勿論、この例は一番易しい初歩の

ことである。しかも、それすらが大事なことなので、自分がかかる問題を事としよう。

ところで先づ語りたい。信仰は行ひである。しかし、その前に聖書を眞に讀み眞にきかなければならない。それはかうである。キリスト者たる者は神の言葉と鏡として自己を見なければならぬ。が、肝心なことは、鏡を觀察することにあるのではなく、鏡の中の自己自身を見つめることである (S. 188)。そして、言葉は正にわが身にあてがつて語られ、わが身のことと語られてをる、といふことを徒にしてはならぬ (S. 238)。更らに、そこで寫つたわが身の姿を忘れてはならない (S. 300)。忘れられると虚空に識し水に描くと同じことになつてしまふ。その憶持のためには沈黙を事とせよ。饒舌の裡では神の言葉はききとれないし、寫した姿を忘れ易くなる (S. 404)。

さて聖書には何と書いてあるか。キリストは道であるといふ。それはキリスト自身の言葉であるから眞理でなければならぬ。ところが、その道は誠に狭く峻しい。神なる彼は自己の運命を知つてゐた。そして人間として卑賤に生まれ、卑賤の裡に世の受難者として罪を負ひ、悪まれ捨てられ罵られた。剩へ神にまで捨てられて辱しめの死につけられた。しかし、彼はその死から死を超えて蘇り、永遠のいのちへと還つたのである。人々はこのキリストに「從へ」 (SSt. 404, 137)。人は二人の主になることは出来ない。世間世上に想ひを致さず、あげて天なる父に托し神に事へよとキリストは教へた。そして彼自身が正しくそのやうに躬を處したのであつた (SSt. 131, 153)。更らに續けて彼は空の鳥を見よ、野の百合を見よと教へたが、それはかく躬を處せる自分を觀よ、自分に倣へといふ謂に外ならぬ (SSt. 153, 163)。キリストは「手本」である (S. 143f.)。人はキリストが世に處したやうに處すればよふ。それは憐みの歴史であり、世に死したる歴史であつた。しかし見よ彼は死して蘇つた。人々も亦たさうである (S. 130f.)。眞にキリストに從ふ者は「聖靈」によつて生命を興へられる。己が生に死ね。聖靈はお前を殺すであらう。しかし、その時、聖靈はお前を蘇らす。そして信仰が興へられるであらう (SSt. 60f., 79)。このやうな意味でキリストは「手本」として彼に「從ふ」ことを要求してをるのである (S. 186)。キリストに「從ふ」としてキリストを「手本」とする

と云ふことは、全く相應する (SS. 125, 184)。「手本」とすると云ふことは向ふに置いて唯崇めると云ふことではない。キリストを射に體することであり、キリストのやうに世に處することである。

人々にかかる要求を受入れることが出来るか。教へはかかることを要求し命じてをる。一人の主事に事へるといふこと、世間的なるもの否定といふこと、これがキリストに従ふといふことである。これはただなる事ではない。それ故、正氣の人はかかる要求の教へに惱まなければならぬ (SS. 166, 181, 182)。教界人は直くにいふであらう。何、信仰してゐるのだと。とんでもないことである。キリストを手本として彼に従ふといふことは、全く人間の性と反對なことなのである (S. 164)。こゝに身を投じるには、人は先づ、「正氣」にならなければならぬ。それは人の性に反して内に向つて自己を知ること、個別に私まつて、神の前なる自己を知り、神の前なる自己の無を知ることである。そして、正しくキリスト教の教へは、人をかく「正氣」にするであらう (SS. 76f, 85, 90, vol. 1, Pectri, 4<sup>th</sup>)。聖書の言葉は學問の對象ではない。神の言葉を客體的な事柄として扱ふならば、それは己の姿を寫して自己を省みる鏡にはならぬ (SS. 22f, 36)。キリスト教は客體的なものより各自の射に體して主體的なものに移されなければならぬ。キリストは單なる論議の教へを世に齎したのではない。手本として彼に従ふことを要求してをるのである。そこが要處であるが、更らに、その上で、同時に彼は「贖罪者」である。「贖罪」によつて、人の心から凡ての不安を逐ひやるのである (S. 186)。<sup>\*</sup>

\* キリストが「手本」であり且つ「媒介者」「贖罪者」であるといふ所以については「日記」にも敘べられてをる (S. B. Th. II, SS. 309 f., 561, 196, 87)。なほ、これらのことに就ては別に敘べる。

以上がこの書の要點であるが、なほ、かかる見地から書中隨所で公的な成立教會を批難してをる。さきにあげた彼の意圖からも當然なことであらう。この書を出してから後、彼は暫らくの間沈黙した。けだし彼は既にいふべきことをいつた。この書は彼の著作活動の結着を示すと思はれるやうな内容である。もつとも、この間絶えず彼はアンティ

クリマクス書以來の論難に對して豫想せられる教會側からの反駁を期待してゐたのであつた。しかし應答はなかつた。ところが、偶々、彼が始終關心をもち關係をもつてゐたミンスター監督の死をきつかけとして、彼の生涯の最後の最も激しい教界批難が始められたのであつた。ミンスターはキェルケゴールの父の牧師で、彼もミンスターの説教によつて育てられた (Tb., II, S. 67)°。ミンスターはキェルケゴールに好意を寄せてゐたやうであり (vgl. Selwampf, S. K. II, S. 288)°、キェルケゴールも自分を氣にかけてくれたのはミンスターであるといつてゐる (Tb., I, S. 355)°。既に以前から、教界に行はれる空談的な教説や客體主義を攻撃する際には、ミンスターのことが念頭にあり、また一面その思想が心にかかつてゐたのであつた。『キリスト教への訓練』が出された頃からのこのことは甚だしく、彼のことゝが屢々『日記』に識されてゐる。\* ことに『自己檢察のために』や、出版せられなかつたその第二部『自己を裁け』は、上にあげたやうな意圖に従つて、彼とその教會社會に擬せられたのであつた。この頃の『日記』で彼はミンスターとの衝突のことについて識してゐる (Tb., II, S. 273f.)°。しかし、彼の生前には彼を正面から攻撃することを避けたのであつた (vgl. XI, S. 190)°。

\* z. B. Tb., II, SS, 188f., 221f., 227, 262, 273f., 彼の死とその後の回想については II, SS, 324, 326, 329, 394,

ところが彼は七十八歳の高齢で、一八五四年一月三十日に亡くなつた。そして二月初めの葬儀に際して、數ヶ月の後に彼の後継者となつたマルデンゼン教授が追悼演説を行ひ、彼を眞理の證し手であるとなしたのであつた。鬱屈してゐたキェルケゴールの心はここに端を發して、成立教會の公認キリスト教に對する公然たる駁論の火蓋を切つた。即ち二月に「ミンスター監督は眞理の證し手であつたか、それは眞理か」を草し、後記を添へて遂にその年の十二月「祖國」誌上に掲載した。證し手とは親迫にゐて眞理を證し、薄命と卑賤に處して憎まれ笑はれ、そして十字架につけられ殺された者をいふ。ミンスターは決して證し手といふ名に値ひする人ではないといふのである。\* その後、論難は相次いで、同誌に寄せられた駁論は翌年の五月末に互つて二十回を越えてをり、中にはマルデンゼンを痛罵したも

のもである。\*

\* S. Ks Angriff auf Christenheit, v. K. Dörner u. Chr. Schrenckf, 2Bde, 1806, I, S. 91f., Schrenckf, S. K., II, SS. 232f., 245f., 276f., 280f.

\*\* vgl. Angriff, S. 107 ff., bzw. 180f.

なほ、マルテンゼンは一八四〇年以來コヘンハーゲンの員外教授、五〇年正教授となり、四五年以來宮廷牧師であつた。思想的立場の人であるが彼に對しては豫ねてからキエルケゴールはその思想的立場に對してはもとより、個人的にも快よからず思つてゐたであつた (vgl. Schrenckf, II, SS. 235f., 243f.)。最後 (五月二十六日) の論難等に於ては彼を痛罵してゐる (vgl. Angriff, S. 192f.)。また、この論難の間に於て、キエルケゴールと相識だつたニールゼンが調停の勞をとらうとしたが功を奏しなかつたやうである (Schrenckf, II, SS. 291f., 298f., Th., II, S. 214)。

更らに五月には別に『このことは言はるべきである。だから、これをさしめよ』(Dies soll gesagt werden, so sei es denn gesagt, (Angriff, a. a. O., S. 186f.)) なるパンフレットを出し、當時の社會に最早や新約のキリスト教は存しないといふことを更めて論じた。また、彼の最後の論策となつた駁論書『瞬間』(Der Augenblick, v. S. K., (G. W., XII)) もパンフレットとしてその第一號をこの月の下旬に出し、引き続き九月の末までにその第九號までを出したのであつた——第十號は彼の生前には出なかつた\*——。この書もマルテンゼンを攻撃し、且つ教界や成立教會の制度的キリスト教乃至國家や教職官吏を非難してゐるが、大概は從來ことに一八四六年以來いひ來つたことを繰り返したものである。

\* この號はイェナ版全集 (XII) にはないが、上掲, Angriff, II, S. 593f. に収録されてゐる。

即ち、宗教的にいへば各自が神の前に「あれか、これか」を決することより外にはない。しかし、決せらるべく向はるべき當のところは無限の距りがある。道は細く門は狭く、通じる仕方は唯だ一つしかなく善である (XII, SS.

4f., 10, 16f.)。キリスト者の決定的大事は「同時性」といふことにある。このことを既に『キリスト教への訓練』でいつたが、キリストの受難、更らにキリストをキリストとして認めることによつて受ける迫害の、その曾つての出來事を目のあたりにして、そこに己が身を當てがふがよい (S. 123f., vgl. *Match*, 10<sup>41, 42</sup>)。それは徒なることではない筈なのに、教界はそのことを忘れて自ら安逸のままにキリスト者を潜稱してをる。それでは一體神は何なのか (S. 25 f.)。また誰もが普通にキリスト者なら、新約聖書は最早や用はない。逆にいへば、今日の世上には新約のキリスト教は地を拂つてをる (SS. 20f., 47f.)。國家が本當にキリスト教のために盡すと云ふのなら、その教職官吏をやめさせるがよい。神的なものを人間的なもので庇ふなどとは大それた矛盾である。教職官吏によつて國民は「神を崇める」ことをするが、實にそれは神を汚辱する結果になる (SS. 30f., 17f., 74f.)。今日凡ての人はキリスト者であるといふが、彼等はキリスト教の何たるかを皆目知らないのである (XII, S. 53f.)。

このやうに、この書は、一般のキリスト者が無限の質の相違に於て、自己を只管なる神への在り方に於て憫むといふことに缺けてゐることを批難し通し、キリスト教をキリスト教界に導き入れることの困難さをいつてをる。題目の「瞬間」とは、勿論、時間の中に於て時間と永遠なるものとの關係する箇處をいふ。そのやうな箇處に人を立たせようとするには、人を決斷に誘はねばならない。それには教界の儉安の非を鳴らして、彼等躬らに思ひを致させなければならぬといふのであらうが、このことのために、將にキェルケゴールその人に於ても今や突如としてこの「瞬間」を決すべき時である。如上の経過を経て來たこの時が、最早や想を練り表現を案じる餘裕のない焦眉の時なるを感じしめたのであらう。一種捨身の構へである。勿論彼自身が「瞬間」を事證するに相應しいといふのではない。何事についても、それに相應しい者には得て野心が出て事が行ひ難い。相應しくない自分ならこそ「瞬間」を決することが出來ようといふものだとなすのである (XII, S. 14.)。「瞬間」の九號は九月に出たが、越えて十月初めに彼は途上に倒れて病院に運ばれ、十一月十一日にその勞多き生涯を閉ぢたのであつた。

(完)

---

## ENGLISH OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

---

*The outline of such an article as appears in more than one number of this magazine is to be given together with the last instalment of the article.*

### Did Kierkegaard Realize his 'Human Religious Existence'?—Notes on the Evaluation of his Writings\*\*

By T. Ishizu

From 1843 to 1855, i. e. during the last years of his life, Kierkegaard wrote about 40 pieces of work. In those writings he said he was a 'religious author' and his central theme was to convey the truth of Christianity. But it is by no means possible to grasp the true character of his thoughts uniformly, for the contents of his thought gradually changed and especially various unique changes are made in his attitude and qualification as an author and in the style of his writings. Particularly he said he had no qualification to show people how to become Christian; rather, his attitude was indirectly or inductively as a third person to arouse the reader's attention and to induce him to reflection. Consequently there may be exaggerations, embellishments, artifices etc. in his writings; and his readers may feel somewhat untrustworthy about them.

But we should pay sufficient respect to the answer which he produced as a result of his earnest inquiry into the existence of man, especially his existence before God, based on the experiment of Kierkegaard's own existence.

Man in his existential structure is rejected by the Eternal. Between the Eternal and man who is only finite there is a rupture. The ultimate end of man is to recognize this fact. Speaking from the Christian point of view, the only cardinal point for a man who wants to be a Christian is to know that man is 'a sinner in his own

nature'. From such a viewpoint of his came out his unique interpretation of Christ and the original basic reason and significance of 'suffering' and 'despair'.

On the whole, the development of his thoughts corresponds with the situation of his own existence and his writings are, so to speak, diagnoses of his own life. Therefore, if his writings, complicated and intricated as they are, are studied correspondingly with the path of his life and with his inner situation, we shall be able to make clear the position and significance of each of his works and thus find the key to the understanding of his thoughts throughout his whole writings.

So it is the object of my article to seek to correlate Kierkegaard's life and writings. I should like to add that the above mentioned essential thoughts of Kierkegaard had already been conceived in the period before he began writing. That part, however, has been omitted in my present article.

\* For the Japanese original of this article, see Vol. XXXIII, No. 12 & Vol. XXXIV, No. 1.

## The Development of the Conception of Time in the Jodo-Buddhism of the Kamakura Period: a Study of Ippen's Idea of Nembutsu in Existence and Eternity

*By* K. Kono

Ippen-Chishin was a disciple of the fourth generation of the great Honen, the founder of the Jodo Sect in the Kamakura period. Ippen is more popularly believed to be the founder of the Ji-shu Sect, but this particular sect derives its name from the word Jishu (meaning 'people who pray' according to the phraseology of Zendo, a Chinese Buddhist priest in the 7th century) with which nomenclature Ippen used to call his disciples. Thus Ippen cannot strictly be called the founder of a new sect, but it is an indubitable fact that he had a system of doctrines of his own: so we must call it an injustice to this great thinker that the Japanese students of Buddhism have in